



社会福祉学科の現在・過去・未来

著者	小倉 襄二, 井岡 勉, 加藤 博史, 小山 隆
雑誌名	評論・社会科学
号	100
ページ	25-54
発行年	2012-06-10
権利	同志社大学社会学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012913

座談会

社会福祉学科の現在・過去・未来

小倉襄二¹⁾・井岡 勉²⁾・加藤博史³⁾
 (司会) 小山 隆⁴⁾

小倉先生を囲んで

井岡 [卒業生名簿を手に取りながら]
 こんなのが出てきましてね。小倉襄二先生の名前が載ってます。昭和25年の卒業生として。教員スタッフとしても載っています。

小山 小倉助教授ですか？

小倉 助手でしょう。

井岡 これは社会事業学専攻一期生の昭和9年卒業生から掲載している。貴重ですね。

井岡 昭和25年卒業の時に小倉先生も入っている。雀部猛利先生は昭和24年卒。

小山 同じ3月に新制で井垣章二先生も卒業なんですね。

小倉 そうです。井垣先生は新制大学卒で第一回でした。

小山 先生は旧制の最後ですね。

小倉 貴重なものやね。

小山 この座談会の趣旨としては「評論

社会科学」が100号になりますので。その記念で各学科が何か原稿を、ということになりまして、加藤先生、井岡先生とご相談して小倉先生に同志社福祉の昔を聞く会を開きたいということになりました。

小倉 記憶が薄れてきましてね。

小山 僕にとっては井岡先生が聞く対象でもありますし。よろしくお願ひします。

小倉 懐かしいですね。

加藤 始まりからということで、昭和6年4月、社会事業学専攻ができた話から。

井岡 90年史に和田洋一先生がお書きになっているんですね。社会事業学専攻については。

小倉 そうでしたか。

井岡 1931年に文学部神学科社会事業学専攻が創設されて専任教員は竹中勝男

1) 1947～1950年在学, 1950～1997年在職

2) 1957～1961・1963～1967年在学, 1971～2007年在職

3) 1968～1974年在学

4) 同志社大学社会学部教授

助教授一人であるということのようですね。「社会事業原論」は龍谷大学におられた海野幸徳先生にお願いしている。外部からは賀川豊彦先生、牧野虎次先生に加勢してもらっている。第一回の卒業生が5名、1934年に。過去を調べていて面白いのは社会事業教育後援会ができたんですね。1932年に同志社大学社会事業教育後援会が創設された。牧野虎次、大沢徳太郎、大久保利武、生江孝之各氏が後援会のメンバーになっておられる。名前は1939年に厚生教育後援会に改組される。1941年大沢徳太郎氏の寄附で「厚生館」が設置された。これは当時の社会事業学専攻の実習の拠点であることと、同志社の教職員、学生に対して診療、健診を行う施設としておかれている。

小倉 厚生館がありますね。その上が研究室だったんです。

井岡 厚生館では1941年、竹中先生が主任で、竹内愛二先生が主事。神戸女学院から来られた。1942年12月、厚生問題研究会が開かれて、竹中先生、竹内先生、大林宗嗣先生が講演しておられる。当時の厚生大臣の小泉親彦が飛んできて出席している。このことで同志社も当時氣息奄々だったんですが、何とか国に認められて。

小山 この頃に厚生学専攻になって。

井岡 厚生学専攻になったのは1941年、神学科だったのが41年には文化学科に移り、厚生学専攻と改組。大林先生が就任されて。

小倉 セツルメント研究の先生でした。

井岡 その時、嶋田啓一郎先生が助手で採用されています。1944年に法文学部厚生学科になっています。専攻から学科になっています。しかし同志社も学生たちが徴兵されてごっそり抜けて、文学部と法学部が統合される。学生たちが出陣していった、学生が激減した。大学では大林教授に対して9月末退職をお願いした。リストラです。ところが大林教授は退職直前に向日町のご自宅で亡くなっています。

井岡 小倉先生は戦前、同志社中学から？

小倉 同志社中学から予科に入り、戦後は文学部の社会学科卒であとで助手になりました。当時専攻とっていなかったです。

井岡 戦前の予科の時代、学生時代、どんな学生生活を送られたのですか。

小倉 学生時代の3分の1は学徒動員で、大阪港区千舟橋の補給基地・需品廠に予科全体が動員で行っていました。近くのアパートがあって、そこに合宿して動員の仕事をしました。

井岡 予科と学部の関係はどうなるんですか？

小倉 予科から学部に行きました。

井岡 専門はないのですね。

小山 教養みたいな。

小倉 今で言う教養学部ですかね。

小山 旧制高校みたいな。

井岡 何年ですか？

小倉 僕らは3年やった。過渡期でし

た。動員に行ったりして学校へ帰ってきたからね。

井岡 予科に入られたのは何年ですか？

小倉 予科に入ったのは昭和19年ですね。

井岡 どんな雰囲気でした？

小倉 同志社はそうガチガチした軍事色はなくて、割合、自由でした。いろんな意味で。戦時下の学生という感じはあまりしなかったです。

井岡 昭和19年で？

小倉 動員に行ったら、それからコロッと変わっちゃって。

井岡 軍が入り込んできて軍事教練とか。

小倉 それはありました。

加藤 「国土・新島」という観念はたたき込まれるんですね。

小倉 ええ。それはもう当時から「国土・新島」の教化はありました。戦時的利用です。そういう側面は新島にあったから利用されたのでしょうか。

井岡 戦前の予科におられて、小倉先生は戦争に対して、どう受け止めておられたのですか。

小山 当時の雰囲気を含めて、回りはいかがでしたか。

小倉 どういったらいいのだろう。今から考えると、そんなに政治的統制という雰囲気はなかったですね。自由でした。軍事教練はあったし、後半は学徒動員で大阪の需品廠にごっそり行ったからね。そこから出征したんです。戦時動員に行っている後半の段階で敦賀に応召で

行ったんです。僕らは特別幹部候補生の要員だったんです。応召で敦賀の連隊に入って試験を受けて士官学校に行ったわけです。

加藤 昭和19年の何月ですか？ 負け戦ですものね。

小倉 昭和19年の年末に応召された。敦賀も大空襲（昭和20年7月12日）にあったからね。それは体験しました。現地にいる時に敦賀がやられた。全部燃えちゃって。そこからいろいろ現地で当時、訓練を受けました。

井岡 戦争は終わるといふ感覚はありました？

小倉 なかったです。勝つと思っていたというより、そんなことは考えなかった。勝ち負けのことはあまり考えませんでした。ズボッと潰かっちゃっているから。勝敗に関しては誰も話題にできなかったな。

小山 勝つまで戦わないといけない。

小倉 そうそう、きちんと組織にはめ込まれちゃっている感じでね。

加藤 先生と同年の阿部志郎先生も虚脱感が、ものすごく続いたとおっしゃっています。

小倉 僕は敗戦の時は豊橋の予備士官学校におったからね。その日のことは覚えているけど、演習に行っておって、すぐに兵舎に帰れと言われた。兵舎の庭に集まったんです。状況はよくわからず、遠くから見てるんだけど、教官たちが泣きだした。大動揺でね、何だろうと思ったら、敗戦詔書が出て、玉音放送があっ

て。わかっていたからね、敗戦は。玉音放送がされて「そこでしばらくおとなしくしている」と言われました。数週間そこにて、後は敗戦処理ですよ。たとえば印象に残っているのは、砲とか小銃とかやすりをかけてね、菊の紋章を消す作業をやったことですね。

小山 ひたすらその作業ですか。

小倉 負けたという実感が、やすりで紋章を消している時に湧いてきました。

加藤 悔しいという感覚ですか。

小倉 悔しいというより、虚脱感だなあ。えらいことになったという感じでね。貨物列車で京都に帰ってきました。その間に軍需物資をどんどん運んでいる印象がありましたね。ひどいもんでした。あとはね。そんな状態だから、僕らの教官たちが東京に行ってたんですよ。

小山 おかしい、本当に戦争に負けたのか確かめようと。

小倉 がっかりして帰ってきました。

小山 やっぱり敗戦は本当やったと。

小倉 改めて集会をやってね。敗戦だと確認しました。その後、1カ月間、敗戦処理に使われて。

小山 同志社中学、予科で、同志社大学に入られるおつもりだったわけでしょう。そういう戦争前から社会事業、福祉に行こうと思っておられたんですか？

小倉 そんなことはなかったです。当時、竹中勝男先生が戦争協力者みたいなところがあったんだけど、先生はいろいろと影響力のある立場をもっていました。戦後に米軍の軍政が敷かれていまし

たが、先生は英語もよくできるから、軍政に関わって行って、京都の軍政下において社会福祉研究所をつかって、そのキャップになった。戦後は京都の社会福祉事業の占領軍体制下の下請けみたいなことをしたわけですよ。その研究所の助手に大塚達雄さんと僕が入ったわけです。

小山 大学を出られる頃ですか？

小倉 在学中です。まだ学生でしたから、研究所の助手です。竹中先生が所長で研究所ができた。住谷悦治先生も入られていた。そこで占領軍の実態調査をやったりしました。竹中先生が創った研究所が、同志社の助手になるきっかけになったんです。僕自身は新聞記者になろうと思っていたから。

井岡 予科を卒業されたのは戦後になりますか。昭和21年、旧制の社会学科に入られた。

小山 専攻のない時ですね。

小倉 予科を出たのが22年。

井岡 昭和21年、文学部社会学科となって、竹中先生が「社会福祉概論」を講義される。嶋田先生は専任講師で「協同組合論」を講義されて。新制大学としての社会福祉学専攻は1948年、それまでは3年ほどは旧制の大学の社会学科に小倉先生がおられた。

小倉 その通りです。

井岡 研究所には井垣先生もおられたんですか？

小倉 大塚先生です。井垣先生はおられなかったと思う。確か、そうです。調査も、大塚先生と僕が。豊田慶治さんはい

ました。

小山 大塚先生、豊田先生、小倉先生、千田さん、望月さんといった方々が研究所にいたのですね。

井岡 井垣先生は新制の大学を出て、「残れ」といわれて。

小倉 その通りです。

小山 小倉先生はジャーナリストになりたかったけれど、竹中先生に「手伝え」と呼ばれて福祉の教員の道にこられたわけですが、先生は厚生学科ではなく、社会学科に入られた？

小倉 社会福祉学専攻は、なかったから。朝日新聞に入ってジャーナリストになりたいという希望は前からありました。社会福祉研究所という占領下における占領行政の一環として、京都府のシステムができたことで、そこに助手で入ったことが同志社に入ったというきっかけです。そういう経緯です。竹中先生に、その段階で「助手」として呼んでいただいて同志社に入ったという。

井岡 それは1950年ですね。前年49年に中條毅先生も専任講師で入られた。

小倉 そうです。中條先生の奥さんもおられた。研究室が厚生館で。

加藤 2階の。

小倉 そうそう、狭いところに入ってあって。そこから講義に行きましたからね。そんな時代でした。

加藤 弘風館に移られたのは大分、後ですか？

小倉 後ですよ。

井岡 明德館もありましたよ。

小倉 明德館にもあったね。弘風館に移った後、研究室はずっとそこで。それまでは致遠館の上におったりね。

井岡 1950年には竹中、嶋田両教授を中心に、中條、小倉、ジーン・グラント、メアリー・ウッド、51年にドロシー・デッソーの各先生を加えて専攻スタッフも揃うわけです。50年大学院文学研究科に社会福祉学専攻の修士課程がスタートします。日本で初めてのことです。井垣先生が助手になられたのは1953年。大塚先生が54年、専任講師で。住谷馨先生が。

小倉 確か61年に。

井岡 井垣先生のお話では社会福祉学専攻というより、社会学科の助手だったとおっしゃっていました。専攻はあっても、ゆるかったということですね。

小倉 おっしゃるとおり。専攻意識はそう強くなかった。それだけの体制にならなかったからね。誰も同じようにクラスをとってね。ただある程度、福祉学についての専攻意識はあったとしても、明確に自分は福祉専攻だという意識はなかった。社会学科でしたから。

小山 新制になってからのカリキュラムでも、確かに学科に共通の「社会福祉原理」とか「新聞学」とかも、すべての専攻生がとらないといけな。共通必修ですね。

小倉 そうしなければ、学科はもたなかったもの。

井岡 壁は低かった。

小倉 学生自身は学科体制としては社会

学科としての共通性が強かったですね。専攻意識よりは。

井岡 終戦になって、これからの新日本の建設とか、明るい希望は皆さん持っておられた？

小倉 成り行き任せという感じで。学生たちはね。

井岡 ひもじい思いもしていたんですね。

小倉 それはもちろんあった。

小山 若手だった先生ですよね。戦後の。若手で燃えていたと思いますが、若手先生としては、どんな感じやったんですか？

小倉 忙しかったよ、それは。体制づくりの中でしたから。ある程度、専攻意識はあったけど、社会学科一本でしたから、助手は使われて。

井岡 僕が入学したのは1957年です。

小倉 専攻意識は、ずっと後です。

井岡 その時でも、新入生歓迎会を社会学科全体で宇治公園で開いてもらった。伊藤規矩治先生が挨拶されて「お前たち同志社に来てコンプレックスもつな。同志社は立派な大学だ」といわれた。井垣先生は「ラ・メール」を朗々と歌われたんです。

加藤 何人くらいの学生数ですか。

井岡 福祉専攻で30数人くらいだったかな。

小倉 僕らの時は専攻意識がなかったからね。社会学科という意識が強かった。これは言える。

小山 それより前に福祉、社会事業、厚

生学科だった時代もあるわけですよね。

小倉 スタッフの先生たちの指導意識は違ったんですけど、学生の側は、はっきりした専攻という意識はなかったですね。社会学科の学生だった。

井岡 垣根が低かったんですね。

小倉 それはありました。垣根は低かった。カリキュラムについても社会学科としてやっていたから。

井岡 落ちついてきたのは昭和30年代に入った頃から？

小倉 遅かったです。

井岡 先生は助教授で大塚先生も。井垣先生は専任講師だったかな。

小山 住谷先生は？

小倉 まだいてなかった。

井岡 助手は何年くらい。

小倉 3年で、あとは専任講師になった時に初めてクラスもったので。竹中先生の後ですから、社会問題のクラスは。先生の後を、僕が持ったのです。

小山 竹中先生がお辞めになっていない段階だけれども、クラスを持たれた。

小倉 先生が参議院議員に出馬することになってね。

井岡 皆さんで止められたと？

小倉 止めました。

井岡 痛いですよね、竹中先生が離れられるのは。

小山 竹中先生にとっては小倉先生が継承者というか。大阪社協の雑誌による社会福祉事業本質論争の特集が昭和25年くらいにありました。あれを今年の大学院の授業のテキストでやって、他の岡村

先生、竹内先生等はみんなが2回ずつ登場しているんですけど、竹中先生は1回だけしか登場してなくて、もう一回は小倉青年が登場しているんです。きっと竹中先生が「2回目は小倉がしておけ」と。小倉先生は、はるかにラディカルなマルクスの理論やら書いておられて。

井岡 雀部先生も。マルクス主義的な。

小倉 マルクス主義を援用しながらやっていますね。竹中先生も、戦争中とは違うからね。方法論としてはマルクス主義とはいわないけど、ラディカルな方法論で話しましたから。

小山 絶対的貧困の状況で、しかも憲法ができたわけですから、まずは保障というのが当然あったでしょうしね。

小倉 時代の雰囲気、ラディカルだね。

井岡 竹中先生の『社会福祉研究』（関書院、1950年）は日本の社会福祉学界にとって先導的な研究書だった。難しかったですよ。僕ら入った時でも研究会でテキストにして。

小山 社会福祉研究会の前身で勉強されたのですか？

井岡 そうそう。難しかった。

加藤 小倉先生が最初に教えられたのは永吉幸之さん（元鹿児島県社協事務局長）とか宇野傑さん（元旭川荘、元岡山子ども協会理事長）とかのクラスでしたね。その前年は住谷先生やらおられたけど、それは教えておられない。昭和28年入学組からですね。

小倉 そうです。

井岡 竹内先生も。

小倉 僕は竹中先生の助手でしたから、そういう僕に対しては竹内先生は批判的でした。

加藤 住谷悦治先生とは？

小倉 研究所で教えてもらいました。

加藤 このお二人はどんな関係でしたか。

小倉 仲良かったですよ。エピソードですけど、一緒に飲みにいたりされましたよ。

加藤 住谷悦治先生は筋金入りですね。

小倉 いや、どうかな。難しいところですね。そのあたりは。追放されて帰ってこられる時は戦後の状況の中で帰ってこられて、ピカピカの看板教授でしたから。学生に人気もあったし、立場としては学者の中でプライオリティがありましたね。

加藤 先生は住谷悦治先生に、いつ頃から師事されたんですか？

小倉 研究所で。使ってもらったからね。街娼の調査などで先生中心に取り組まれました。

小山 竹中先生は、どういう方だったんですか？

小倉 まあ、どういったらいいんだろう。ヒューマンな人でね、ユーモアがあって、人間的な幅と包容力がありましたね。クリスチャンでしょう。でもクリスチャン臭はなかった。親分肌の人でね。面倒みがいい。何度もお宅に伺ったり、お世話になりました。

井岡 威風堂々という感じですね。

小倉 威風堂々というか、存在感はあったですね。

井岡 竹中勝男先生が同志社にこられた時に明德館でお見かけしたことがあるんですが、威風堂々という感じだったと思います。

小倉 大きいしね、異相というか、顔つきが日本人離れしているところがあってね。

小倉 竹中先生が国会議員になることに僕は猛反対してね。

小山 同志社関係は皆、反対したんでしょう。嶋田先生も。

小倉 困るからね。もう反対したけど。鈴木茂三郎などが3回来たかな。

小山 社会党左派の。

小倉 党首だったでしょう。

加藤 嶋田先生との接点は、いつですか？

小倉 やはり研究所です。研究に対して嶋田先生は関わってなかったけど、竹中先生がおられて住谷悦治先生もいらしたから、交流はありました。しかし嶋田先生とは、当時あまり深い関わりはなかったです。竹中先生のかかわりで同志社に来たということですね。

小山 「この研究をとりまとめることに力を尽くされたのは住谷悦治、大塚達雄、小倉襄二の三君である。」と竹中先生が『街娼 実態とその手記』に書かれています。1冊を3人でつくったんだと。

小倉 よく、こんなものかできたと思います。

井岡 これはずいぶん普及されたんですか？

小山 インターネットで古本を探すと沢山でてくるんです。たくさん出ていることは部数も出ている証拠でしょうから。この本は6000円で買いました。

井岡 1950年代後半に僕は入ったわけですけど。

小倉 井岡さんの方が詳しいんじゃない。そのあたりのことは。

井岡 僕は小倉先生の「社会問題」を2年生でとりました。3年生で「公的扶助論」をとりました。早口で分かり難かった。

小山 カリキュラムでは、1931年から「社会問題論」は必修科目にあるんですね。昭和6年の社会事業学専攻ができた時からですね。

小倉 担当者は誰？

小山 書いてないですね。どなたでしょうね。80年間一貫して設置されている。

小倉 大学のカリキュラムで「社会問題」というのは珍しいんですよ。

井岡 同志社の特色ですね。

小山 戦争中も。厚生学科の昭和19年の時にも「社会問題」「社会調査」「社会政策」の科目は厚生学科に変わっても「社会」は使われているんですね。

小倉 珍しいんじゃない？

小山 「社会政策」も生き残ったわけですね。名称として。厚生政策ということでもないんでしょうけども。社会政策。

井岡 戦後、「社会政策」は中條先生が。

小倉 概論が嶋田先生だったね。

井岡 概論は3回生から。

小倉 必須科目でした。

井岡 社会思想史はどうですか。

小倉 僕も受講した。名講義だったね。「協同組合論」も。

井岡 嶋田先生の講義は格調高かったね。

小山 戦前は「社会問題論」を教えておられたのは？

小倉 竹中先生です。僕が、あとを受け継いだわけや。面白い講義やった。冗談ばかり言うて。

井岡 小倉先生は社会問題の中で「老人問題」を講義しておられた。

小倉 それは早かった。

井岡 老人福祉のレポートを書いて88点もらった。

加藤 それは優秀ですね。

小倉 へんな点や、90点にしたらいいのに。

井岡 90点にしないのが、いい。

加藤 昭和28年が小倉先生の最初に教えられた学生で。次の次に福富先生、棚橋信生さん、竹田勝彦さん、畑文雄さんが入学してきて、その次に萩原史郎さん。伊藤光行さん。その次が井岡先生、中川健太郎先生、榮樂昌洲さん、といった面々ですね。社会福祉研究会は、いつできたんですかね。萩原さんらによると、部屋をもらってたんですって。

井岡 明徳館の西側の2階に部屋があってボックスにしていた。そこが「社会福祉研究会」の拠点です。

小山 後のサークルとして「社福研」が

ありますが、そこはまた別でしょう。

井岡 別やろね。「社会福祉研究会」は大学紛争との関係やったと思うけど。

小山 「社会福祉研究会」と「社会福祉学研究会」が対立していたみたいですね。イデオロギー的なことで。学園紛争の頃ですね。

井岡 専攻学生たちがやっていた「社会福祉研究会」は、やがて「社会福祉学研究会」になっていくわけです。

小倉 それが何年頃？

井岡 後だと思いますけど。70年代じゃないでしょうか。ボックスを大学から返せといわれて。

小山 福祉の戦後、大阪市立大学とか関西学院大学にもできたけど、日本で何番目かという議論は、ともかくとして、戦前から戦争中をくぐり抜けて、その中心的役割を昭和20年代から背負ってこられて同志社の位置づけを果たすべき役割を意識されたりということはありますか。学会との関係とか。

小倉 人文科学研究所の「キリスト教社会問題研究」グループがあって、そこに入って初めて同志社で学ぶ意義とか、山室軍平先生とか。同志社の福祉の歴史が初めてわかったという、うかつな話やったけど。それまで、わからなかった。

加藤 小倉先生は留岡幸助についての論文を早くから書いておられますね。

小倉 人文研で。それからCSにかかわり始めて取り組むようになりました。

井岡 イギリスから帰られて。それより前ですか？

小倉 CSは長いですからね。一時止まったんですけど。留岡のことについては。

小山 先生同士の交流、岡村先生も孝橋先生も授業にいられて。全国とはいわないうまでも、オール近畿のレベルで先生同士の交流とかはありましたか。

小倉 関学との研究会交流はありましたね。かわりがありました。あれはね、いつ頃になるかな。専任講師の頃から関学とのかかわりはありましたね。

井岡 僕は学生の頃に「関西学生社会福祉セミナー」を呼びかけてやった。4年生の頃かな。

小山 井岡青年は学部生の頃から学生委員会の「社会福祉研究」に論文を発表されたり。井岡学生は論文を積極的に発表していました。学生の「社会福祉研究」。

小倉 それはあるの？

井岡 資料室に寄付しました。

小山 学生委員長をされて。

井岡 そこを拠点にして関西の学生に呼びかけてセミナーをやったことがある。関学は竹内先生がサポートしてくれました。関学とか大阪府立女子大学、大阪社会事業短大、西京大も呼びかけたかな。大阪市立大学も。

加藤 「留岡幸助」について、人文研に1958年、小倉先生が書いておられます。その前は「公的扶助」のことを書いておられますね。「評論社会科学」の創刊号にそれまで出ていた「人文学」のコンテンツをまとめたんですね。ここにある創刊号は僕のものですよ。よく無くさず

に持ってたと思います。学生の三年の時に配られたものです。

小山 学生からお金をとって成り立っていますからね。

小倉 懐かしいですね。

井岡 安保闘争の時は小倉先生はイギリスでしたか。60年安保。

小倉 イギリスにいました。

井岡 向こうでデモに参加されて？

小倉 核武装反対のデモ隊に。旗、持ってね。

井岡 その写真の小倉先生は吉原君に、よう似てるねん。貴重なもんやな。

小山 安保でも、そうですが、社会的、政治的なことに同志社の福祉、学生、教員たちが専攻で、ということはなかったですか。一人ひとり自由に？

小倉 あまり、そういうのはなかったね。まとまってイデオロギーを提起するという感じはなかった。その点ではフリー。自由、非拘束で。一つのことをまとまってポリシーをやるということはなかった。

井岡 60年安保の時は中川健太郎とかラディカルにやっていたね。僕も大塚達雄先生の研究室にいて「先生、デモに出るべきや」と。60年の頃。

小山 大塚先生は、どう答えられた？

井岡 「出る」とはおっしゃらなかったけど、後で「おい、出たで」という報告をされて。そんなことがありました。4回生の時。すごかったね。

加藤 樺美智子さんの死もショックだったんですね。

小山 リベラルというか、先生の記憶の範囲では、戦争中も、ある程度、当時を思い出してみても不自由だったということではない？

小倉 戦争中は同中から予科に行きましたが、軍事教練はあったし、チャペルも日の丸を貼って、配属将校が威張っておった。しかし細々ながら礼拝は続いていた。中学で洗礼を受けたんですが、ゆるい雰囲気はありましね。戦時色でぎゅうぎゅうやらなかった記憶はある。同志社には、ゆとりはありましたね。ただまあ、思い出すとひどい話やけど、同志社から歩いて明治御陵までいったりしました。でもそんなに戦時色はなかったと思います。

小山 ある種の自由とか、リベラルで、ゆるやかに。

小倉 一つのイデオロギーで大学全体を縛るという感じじゃなかった。アナーキーといえばアナーキーですけど、そういう学校でしたね。宗教部は自由でしたよ。

加藤 ところで、「評論社会科学」には、鶴見俊輔さんの文が載っている。62年。僕はバリケードの時代ですけど、鶴見さんは自由大学をやっていた。68年くらいだと思います。

小倉 「大学に機動隊を入れたら、わたしは辞める」と鶴見さんが言っていた。

加藤 辞める前に、自由大学をされていた。矢内原伊作さんもおられましたね。伊作さんのお父さんと嶋田先生が親戚なんですね。孝橋先生はいつ来られたんで

すか？

井岡 嶋田先生の理論に心酔していたから。大学院も岡村先生をとっていた。僕は孝橋先生はとらなかった。

小倉 何の担当でしたか？

井岡 特講ではないですか。中川健太郎さんとか三塚武男さんは孝橋先生の講義をとってたと思う。社会科学を学びたいという学生たちが。僕は岡村重夫先生だった。

小山 昭和6、7年の卒業生の思い出の文で、女子学生が、その時点で「神学部にあるのはけしからん。なんで社会学部ではないのか」と憤慨したり。専攻開設60周年記念の感想文にあります。

加藤 第1期生の旧姓小島（見市公子）さんとかの文章を読むと分かりますね。

小山 問題意識を持っておられて。その方が後でも二期生の賀集先生が、朝日新聞に正職員で入って、同時、女性がアルバイトで、後輩が男で上司になるのは気に食わんと怒ってたり。時代を越えた問題意識、おかしいことは、おかしいと思う感覚は、80年前にもあったようですね。

加藤 賀集先生は同志社社会福祉学会の創設時の役員をされていましたね。幹事されていたんじゃないですか。発足の時。

井岡 1962年、「同志社社会福祉クラブ」ができましたね。岸田亨さんが会長で、クラブは後に開店休業になってしまったんですが。

小倉 部外者も入れて？

井岡 同志社の社会福祉クラブ、同窓会のようなものです。

加藤 岸田先生は京都市役所におられたのですね。

小倉 公的には交流がありましたけど、プライベートには、あまり。

井岡 岸田さんは京都市の区長をされて、定年退職後、京都市社協の事務局長になられた。

小倉 そうでした。

井岡 初めて専任の局長やった。府社協から連絡文書を持っていったら「こんな書類はあかん」と、よう怒られた。

加藤 後輩の意識はあったんでしょう？

井岡 怖い人やった。

小倉 そやね、なかなか怖い人でした。

井岡 賀集さんも怖い人やった。

小山 賀集先生は嶋田先生と同じ学年です。賀集先生は「嶋田君はキリスト教倫理の方やと。俺ら福祉学んだ連中は勉強できへんから助手になれへんだんや。キリスト教の方の人が助手になったんだよ」と冗談をいっておられましたけどね。

井岡 60年代半ばに福祉から産業関係専攻ができた。1965年。角田豊先生も1年前に福祉にこられて。

小倉 病気になられて亡くなりましたね。残念なことでした。

小山 産業関係学に行くために1年準備で。1964年頃。65年に、できたから。

小倉 何年おられたかね。角田先生は。

加藤 原慶子さん、木原和美さんは角田豊先生に習っている。木原さんは、もの

すごく角田先生を尊敬していました。

井岡 三塚さんも角田先生に学恩を受けたと。

小倉 親しかった。10年おられたかな。

小倉 枚方の病院に入っておられて、何度か、お見舞いにいきました。辛かった。

加藤 関西社会保障研究会がありましたね。角田先生とか坂寄俊雄さんらがおられました。

小倉 法律文化社で「現代の生活と社会保障」というシリーズを出したことが思い出されます。

井岡 角田先生は70年代後半に病気になられて。僕らみたいな若輩にもいろいろとアドバイスしてもらって。意識がなくなるまで研究計画を書いて「こういうことをしたい」と。学問に殉じられた。

小倉 病院に行っても、そんな話ばかりやった。

小山 産業関係学ができたことは、どんな感じでしたか？

小倉 僕らは歓迎でした。中條先生は強く福祉を基盤にして労働福祉に展開していくということを言っておられた。よかったですとっていました。

小山 学部をつくることを視野に入れて？

小倉 その時は、なかった。

井岡 学部構想は、いつ頃からあったんですか？

小倉 大分後ですね。

小山 何回か、あったんでしょうけどね。

加藤 小倉先生がゼミを持たれたのは、いつですか？確か1962年卒業がゼミ1期生ですね。

井岡 僕らの頃はなかったよ。嶋田，中條先生だけ。

小倉 教授が持っていたからね。

井岡 僕の時はいなかった。

加藤 僕は68年入学ですが、嶋田先生、大塚先生、小倉先生、井垣先生、住谷先生の5人のゼミで黄金時代でしたね。井岡先生が非常勤になったのはいつですか。

井岡 1968年かな。最初は実習担当で、1年やった後、英書講読。

加藤 僕らの同級生は井岡先生に習っているんです。

井岡 室田君とかね。杉本君とかにも教えました。黒木先生なんか、当時から髭で。

加藤 井岡先生は颯爽たる青年で、キャンパスを闊歩する姿は当時「カッコいいな」と思っていました。

小山 68~70年で社会福祉学専攻のカリキュラムが変わっているんですよ。この時期毎年のようにカリキュラム改定が行われている。そして、70年頃にほぼ現在に近いカリキュラム体制になるんですね。次は福祉士制度導入で大きいカリキュラム変更があります。先生の数と学生定員は連動すると思いますが、65人の学生数で先生が7人の時代が長かったですね。

井岡 どの専攻もオープンやということで、人数も、でこぼこなかった。7人全

部。それが長かったね。

井岡 次は、紛争の話を学生当事者から。

加藤 僕の入学したころは、航空母艦エンタープライズの佐世保入港阻止など67年頃から学生運動で騒然としていました。同志社に入った年には、5月にパリのカルチュラタンで学生運動が昂揚し、世界中がその雰囲気でした。ベトナム戦争の真只中で「ベトナムにどんどん爆弾を落としていて、なんとけしからん」と純粹に思いました。世界中が燃えていましたから。毛沢東の造反有理までずっと繋がっていくんですね。全体の雰囲気がね。熱い時代でしたね。日大闘争，東大闘争があって、急に冷えるんですね。1970年には、実は何もなかったというか。70年6月、デモはありましたが、僕は参加しませんでした。大学は大学当局によってロックアウトされていて、夜中に「ロンド」という喫茶店の下で映画研究会の連中と酒を飲んで学生会館の裏に行き、入ろうとして警備の人に見つかって逃げたことがあります。そのまま河原町まで出て、当時、「紫苑」という終夜営業の喫茶店があって、そのジュークボックスでジョン・レノンの「レット・イット・ビー」を聴いて夜を明かしました。それが私の70年6月11日です。

井岡 加藤先生の頃はノンセクトラディカル？

加藤 僕はセクトに一切入っていませんでした。権力奪取の考えではだめだと思

っていました。僕が所属していた学生会館5階の歴史哲学研究会が赤軍に選挙でとられたりしました。加藤登紀子さんの夫の藤本さんなんかカッコよかった。そんな時代ですね。今出川の先生の部屋も全部バリケード封鎖で、そこへ普通に入っていませんでしたから。偉そうな顔をして「疎外論」をふっかけたりして。牧里先生なんか、「変わったのが2回生におるな」と思っていたみたいで。今も会うたびに冷やかされますけど。面白い時代ではありましたね。

井岡 小倉先生は直接対応されたわけですか。学生に？

小倉 たまにはありましたね。

加藤 山本浩三先生が学長だったかな。住谷悦治先生が総長で。

井岡 学生は吊るし上げしましたね。住谷先生は尊敬されていましたね。総長で。小倉先生は団交には立ち会われました？

小倉 何度か。僕は書記長やっていたしね、組合の。徹夜団交があって。

井岡 僕が同志社に就職したのは71年やけども、入った途端に泊まりこみの警備を手分けして、警護にあたったよ。71年。

小山 何を警護するわけ？

井岡 学生が入らないように。

加藤 全体の熱い時代が終わった後、先鋭化していきますね。

小山 一部過激化して80年代くらいまで続いている。

加藤 赤軍事件があった時にいっぺん壊

れますけどね。

小山 小倉先生は京都府立大学で社会保障を教えておられましたね。これは、京都府立大学での小倉襄二先生の「社会保障論」のコピー。こちらは同志社の嶋田啓一郎先生の「社会福祉概論」のコピー。それぞれ真面目な学生の直筆ノートを借りてコピーをとったものです。

井岡 よう、コピーとれたね。

小山 真面目な学生はきちんとノートとっていますから。小倉先生のノートは、テストの点数をとるために僕が学生として友人からコピーしたんです。嶋田先生の方は僕が大学四年生の時に定年を迎えられたのですが、「最終講義を聞きたい」と同志社の友人に僕は事前に頼んでいたんです。それが「忘れていた。すまん。嶋田先生の授業、先週終わった」と。お詫びに真面目な友だちのコピーを代わりにくれたんですわ。

井岡 当時は、先生が読み上げて筆記するという講義もあったね。

小倉 これは貴重なもんやな。

加藤 68年に被差別部落の調査をされたのはどういうメンバーだったんですか。調査をしようという機運があったんですか？

小倉 草津市から要請があって。

井岡 大塚、住谷先生も？

加藤 不良住宅。

小倉 そうそう。草津川が、ちょっと雨が降ると浸水してね。行商、日雇いの人たちが多かった。

加藤 68年の報告ですが？

小倉 67年に調査して。

加藤 被差別部落を含めて、そういう状況が、まだ残っていたということですね。

小倉 そうそう。京都市内も調査しました。最近では地域調査をやりませんか。

小山 行政からの依頼等はないように思いますね。

加藤 いつ頃まで残っていましたかね。80年代までか。

小山 個人の先生が頼まれて他の先生に頼んだんですか。それも大学への依頼。

小倉 福祉専攻に。僕がパイプ役になって委託を受けましたね。

加藤 小倉先生が行政の仕事にコミットされたのは？

小倉 京都市とか大阪市とか。各先生方もかかわっておられましたね。昭和30年代が盛んでした。私は、大阪市と京都市と枚方市、高槻市、摂津市だったかな。審議会にかかわっていたから。

井岡 専攻として部落問題の実態調査は貴重なものですね。

小倉 福祉の一つの歴史的な取り組みだと思いますけどね。

加藤 同和地区への強い関わりはなくなりましたが、新しい形でメンセンディーク先生らがマイノリティへの関わりをやっておられる、在日のことや、刑務所に入っている人たちのことを学生が調べるよう指導されています。新しいマイノリティへの関わりというか。そういうのは同志社で何とか引き継がれているのではないか。

井岡 社会問題担当として新たな課題に取り組むという。

小倉 マイノリティではあるね。

井岡 社会学科で小倉先生、松本通晴先生、三沢謙一先生らと過疎地に入りましたね。三和町とか和知町、久美浜町など。過疎地の調査、京都府のプロジェクトで。1970年代。綾部もありましたね。

加藤 当時、「限界集落」という言葉はなかったでしょう？

小倉 「過疎」というのはあったけどね。

井岡 綾部は全社協の調査です。小倉先生はじめ、真田是、遠藤滋、岩見恭子、加藤園子各先生。そういうメンバーで綾部市中山間集落の在宅福祉の課題を調べました。

小倉 あの当時、京都府は「炉端懇談会」があってね、集落で小さなグループで地域の問題を話し合うという設定があって、よく参加したものです。要請があって。

小山 行政側が協力するのか、利用するのか、そういうのが多かったんですかね、昔は。

加藤 福祉国家に向けての大きな流れはあったんじゃないですか。1973年が福祉元年ですわね。福祉元年に向けても、行政の革新市政ができてきたし。

小倉 革新市長会が力を持っていたから。

加藤 「シビルミニマム」が提唱されましたね。

小倉 松下圭一の共同研究があってね。

井岡 綾部の調査は全社協に報告書を出

しました。調査費は出たけど、採択されなかった。在宅福祉サービスの機能的アプローチがないからでしょう。在宅福祉が成立しうる自治体行財政上の諸条件も含めてマクロ的に出したわけですよ。それは取りあげられずに。

小山 求めるところではなかったと。それを承知で依頼したんですか？

井岡 承知ということはなかったけど。

小山 ちゃんとした報告だから、いけるはずだと思ってたけど。

井岡 採択されなかった。

加藤 僕らが学生の時は「政策派」と「技術派」という言い方があって、大塚先生のケースワークをしている人は「技術派」で、小倉先生は「政策派」で。「お前はどっちに行くんや」という単純な頭がありましたね。

小山 方法論と政策論と。今や政策論が批判的ラディカルな意味ではなく、メジャーとしての政策を考えていくものになっちゃいましたね。政策論と方法論という言い方は、ありうるけど、政策論は批判的な脈絡での政策論ではなく。

井岡 政策技術論やね。

小山 ありようを考えていくという肯定的な枠組みの中の議論になっていますね。政策論をしっかりしなきゃ、というのは批判的な意味ではなく、進めていくという。

加藤 大塚先生のケースワークのテキストが60年代に出されています。孝橋先生が仲立ちして、ミネルヴァから本が出されているんですよ。孝橋先生と大塚先

生とのコンビネーションは意外でした。

小倉 僕は助手から入っているけど、社会学科の雰囲気はフリーでしたね。特定の先生方が研究の制約をすることは全くなかった。自由にやらせてくれた。それは伝統ですね。他大学の事情を聞くと、そういうことはないらしいですね。チェックが入ったり。フリーだけど、自己責任性が、同志社の伝統にある。それは実感していました。それよかった。

井岡 制度、政策論と方法論と両方バランスをとって同志社は来たという。ある意味でアバウトでもあるけど。

小倉 同志社の伝統をね、同志社の新島襄の教える伝統、歴史性が自覚されてきた。それはいいことだったですね。

小山 学生とか助手だった頃は、そんなに強調されていなかった？

小倉 何年前からかな、人文研のCS研究は大きかったですね。学科に影響を与える。研究交流ね。同志社の福祉の歴史性に対する反省や自覚が生まれてきました。このとは大きいと思いますよ。今でも、あらわにはいわないけど、伝統を踏まえての同志社の位置づけはあるからね。大きいと思う。周囲の人たちも同志社の高いアンディンティティと伝統に対する敬意があります。同志社には歴史性を踏まえ研究するという伝統があるという認識が周辺にも広がっていきました。

加藤 新島襄の精神は、ずっと学内にありましたか。

小倉 それはあったですね。新島に対する批判はあるけどね。

小山 山室軍平でも福祉学科ではないわけですが、同志社福祉という切り口から固めて、祖先と見ているような見方が。

小倉 留岡を含めての関心や伝統が、同志社の歴史性の中で大きな位置を占めているということはあると思いますね。今でもそうですよ。断りはしないけど、歴史的背景の中にある学科というか。

小山 昭和20年代の社会福祉の授業で、しきりにいわれていたことではない。その後。だんだん意識されるようになってきた？

小倉 嶋田先生とかの一つの教え方があって生まれていました。若いけど、よくわかりました。意識的に展開するというか。

小山 「底辺に向かう志」。あれは小倉先生の造語ですか。どんなことで思いつかれたのですか。

小倉 社会事業論の講義の中で。いつだったか。はっきりしないけど、使っていた。早い段階で。

小山 そこで同志社を伝えようとした時に出てきたということですね。留岡だったか山室だったかは「下への出世」という言葉で表現している。発想としては同じだろうと思いますが。「底辺に向かう志」、カッコいいですね。

小倉 同志社の伝統だし。同志社の志ですね。それは今でも先生方にあると思う。「底辺」という定義は多様だけど、「志」という伝統は同志社のコアではないですかね。そういう言葉で表現しているだろうと。「志」は共通語として。

井岡 80年に嶋田先生が退職されて、小倉、大塚両先生が中心になっていただいで。

小倉 嶋田先生がお辞めになったことは大きかったですよ。嶋田先生がいらっしゃることは、ある一つの同志社社会福祉のシンボル。いらっしゃることにシンボル。批判もあったけど、同志社の福祉のリアリティでした。体現しておられました。先生は、ああいうお人柄だから自己主張はされなかったけど、講義とか先生の発言が同志社の福祉の一つの大きな存在理由を体現していましたね。頼りになりました。寄り掛かっていた、僕らもね。

小山 旗が、しっかりあって、その元で小倉先生、大塚先生等続く先生方が実質支えておられた。

小倉 知らず、知らず、寄り掛かっているとこのところがありましたね。嶋田先生の存在に。回りもそう見ているし。

小山 嶋田先生については秋山先生という伝える係の方もいらっしゃる。竹中先生は、少し遠い先生ですし。

小倉 竹中先生は、僕が近いし。

小山 竹中先生のことを、小倉先生に昔話を語っていただいたり、同志社の福祉をつくった方ですので。おそらく社会学部構想につながる社会学科の話も聞きたい。

小倉 竹中先生は戦争責任の問題がありましたから。そういう言動があって、そこがこじれないで、政府との関係で。

小山 竹中先生のお弟子さんたちは、そ

の部分があるので、尊敬もしているけど、語りにくかったというところはありますか。孝橋さんとかと比べたら。

小倉 竹中先生に対して周辺から批判があった。戦時下の言動に対して。そこを先生が、しのいだというか、ある時、京都の軍政部との関係で先生が、ずっと経験を含めて撤去していかれた。それは、よかったと思いますよ。こじれとったら、なかなか大変だった。

加藤 その点、嶋田先生は、ある面、アリバイがあるというかね。体調を壊しておられた。

小倉 風当たりが強かったのは竹中先生でした。それは何とか、つながれた。それが同志社の社会学科の基礎づくりにつながった。

小山 厚生学だったということで、厳しく責められたら、いっぺん社会学科になった時に、できなかったかもしれない。

小倉 そういうことは、いえると思う。

小山 将来的な社会学部構想、社会学科構想で、福祉だけでなく、新聞学科を入れる形で竹中先生が構想し直された。政治力とか視野の大きさですね。

小倉 それは、ありましたね。

井岡 すごいね。

小山 生きておられたら社会学部を。

小倉 社会学部があるのは、竹中先生のおかげです。

加藤 嶋田先生が「人格」を一貫して重視されたのも同志社社会福祉の大事なアイデンティティですね。

小倉 体現者でしたからね。言うだけで

はなく、誰もが認めておったから。その点では、シンボルとして存在感がありました。

加藤 全国的に社会福祉の理論に影響を与えた人との交流もありますね。小倉先生は1971年に、「人物でつづる近代社会事業の歩み」を一番ヶ瀬康子先生や吉田久一先生、柴田善守先生と一緒に編集されています。社会福祉学会がつくられて、そこが充実していく、そこに先生は立ち会われてこられたわけですね。

小倉 一番ヶ瀬さん、真田是さん、三浦文夫さんも大事な仕事をされましたよ。

井岡 小倉先生は同志社の社会福祉に対して、どういうことを望まれるか。

小山 これからの同志社社会福祉に注文を。

小倉 どういったらいいだろう。歴史性を含めて、同志社社会福祉は存在根拠を持っている学科だから、状況に対しての強い提言を出していくことが大切ですね。インテンシブに、アウトサイドに向かったの発言力を強めてほしい。力量と伝統と存在理由が、ありますからね、同志社社会福祉は。

小山 現在の福祉教育は、社会福祉士の制度を無視しては語れないですが、確かに歴史のある学校は、社会福祉士の制度がある前から社会福祉学科はあったわけです。そこで福祉教育をされているという歴史を持つかどうか。

小倉 資格以前の人物が、それぞれの地域で同志社を出た人物が働いてきたという、重い実績がありますからね。有名無

名の人物を含めて。その実績を踏まえた自覚は大きい。立ち返っていく場面があると思います。同志社の歴史性の中に、その大きな根拠があるから、それを今の言葉で表現し、先生方が理論設定の中に入れて込んでいくという課題があると思います。

小山 他の言葉でも表現できるだろうけど、新島襄であったりとか、それぞれの過去の言葉で確認できるという部分がありますね。

小倉 まだまだ発掘しないといかん部分があるんじゃないかな。先輩が、どういう働きをしたか、未発掘が、ずいぶんありますから。

加藤 福祉全体が、劣化してきているような感じがしてしかたがありません。

井岡 劣化しているね。

小倉 どういう面で劣化と捉えていますか？

加藤 自殺が14年連続3万人、うつ病が10年で2倍に増え、1800万人の非正規労働者、3人に1人が非正規労働であ

ること。貧困率が高くなり格差が広がってきている。生活保護が210万人。虐待も増えている。社会問題はこんな状態ですが、それに福祉は全然対応しきれていない。危機だなどと考えます。

小倉 社会福祉学界にポジティブな働きがないわね。受け身でしょう。全体の状況は。この状況に対して福祉サイドからポジティブに何をするかという提言が見えないね。はっきりいって。

加藤 改めて人間の価値をきちっと提起して人間を大切に社会を提起していかないと。福祉の新たなパラダイムを提起しないと、だめなんじゃないかなと。

小倉 社会福祉制度自体は定着し、成熟しているよね。だけどそこから次の課題に対するポジティブな提起が見当たらない。現状維持に終始しているね。課題はいっぱいあるのに。そこが難しい。

井岡 先生ありがとうございました。先生は帽子を被らばったら、シャーロック・ホームズや。

小倉先生のインタビューを終えてー補足ー

井岡 小倉先生とのお話に出たけれど、旧厚生館という建物がありますが、あれが社会事業学専攻学生の実習拠点だった。当時として大変ユニークな施設だね。

小山 いまもそこに建物が残っています。

小山 先生たちも旧厚生館での授業を受

けられたんですね、大学院の授業は。僕なんかは、まるまるそこやったんですわ。旧厚生館で全部、授業を受けてたんです。

加藤 老朽化した建物でした。今、あるんですか？

小山 今もあります。授業では使っていません。(注：インタビュー後、取

り壊された)

井岡 旧厚生館での授業は2階でやっていた。旧厚生館の寄附者・後援会の大沢徳太郎は実業家。後援会の大久保利武は侯爵で。同牧野虎次は同志社の大先輩、著名な社会事業家で後の同志社総長。

小山 大久保利武は大久保利道のお子さんでしたかね。

加藤 大沢徳太郎の後任として大久保利武は昭和17年7月、同志社大学厚生学教育後援会理事長。その後任に昭和18年7月生江孝之が同理事長と記録にあります。

小山 本も寄付してくれている。

加藤 生江が、どんな経緯で同志社に関わっているのか井岡先生ご存知ですか。

井岡 いや、存じ上げません。調べてみる必要がありますね。

井岡 戦後、社会学科になったのは1946年、新制が1948年で、その間、社会福祉学専攻はなかったわけね。社会学科だから。新制になって専攻となり、50年には大学院ができて、小倉先生が助手で採用されるということになるわけね。

小山 厚生学に変わったでしょう。戦時中に。厚生学になったから「厚生学史」という科目をおいているんですね。厚生学の歴史が、あるはずない。その頃に歴史をおいているし、継続性を否定したら存在しないはずなので、厚生学に名称を変えた時に、社会政策等社会系の科目も、置かれているし。

井岡 「厚生」という名前が冠されているね。

加藤 社会政策は、その頃におかれていたんですか。

小山 確か、その頃に、本体は厚生に変わっているけど、2,3科目は「社会」何とかという科目が残っていたと思います。

井岡 竹中、竹内、大林が講演しているわけですね。翼賛体制下の厚生問題対策に関する講演をした。

小山 時代に対して各先生が本気で迎合しているのかどうか。まさに同志社を守るために、例えば、竹内さんがケースワークを守るという意識で当時を過ごしたのかどうか。批判的に見るのか、好意的に評価するのか、悩ましいところだと思いますね。

井岡 竹中先生らの翼賛体制下の言動について、戦後、戦地から復員してきた学生たちにそれを追及されるわけ。竹中先生は免れたんだけど、竹内先生は追い出されたという形やね。

加藤 竹中先生は戦時中の言動を総括すべきなのに、あまりきちっとしてないと小倉先生が指摘されていました。

井岡 60年代半ばに産業関係学専攻が社会福祉学専攻から分離して。これは大きな出来事の一つやね。それがあって、やがて70年安保やね。加藤さんとかは学生として。僕は71年に教師として入ったわけで、ピークの時ではなかった。

井岡 80年嶋田啓一郎先生が定年で辞められ、岡本民夫先生が入って来られる。86年大学院の博士課程ができる。

小山 直接、学内ではないですが、社会

福祉士制度ができたのが、1988年ですから、この前後に結果的にカリキュラムについては、嫌でも影響を受けますね。

井岡 80年代を、ポイント、ポイントでみると、一番大きな出来事は1986年「同志社大学社会福祉学会」創設ですね。

小山 学会誌の1号が、86年12月6日発刊です。田辺学舎において成立ですね。このきっかけは？

井岡 黒木先生が熱心に仕掛けていった。前に「同志社クラブ」があったけど、そのような同窓会的なものではなく、学会として立ち上げた。

小山 1期の役員体制は嶋田先生が会長で、小倉、大塚、岡田藤太郎、岡田真喜、雀部、佐野、賀集、床尾、山村。

井岡 嶋田先生の創設の挨拶があって、そこに背景とか必然性が入ってないかな。

井岡 他の大学で、すでにあったわね。同志社がないのはおかしいと。

小山 大阪府立大学は発表会をしたりとありましたね。

小山 小倉先生が、同志社はフリーだとかリベラルだという、派閥的な拘束がないという特徴があるとおっしゃった。若いものが尊重してもらえるという、アナーキーという言葉も使われましたが、一つの特徴としておっしゃって、理解できますよね。それ以外に先生方も学生時代を経られて、同志社福祉を、どう位置づけますか。

加藤 井垣先生など徹底した非戦争論者だったんですよ。あんな厳しいものをお

持ちだと学生時代に思ってなかったんですが。基本的人権についても、きちっとしたものをお持ちで、住谷先生もそうだし。自分の学生時代の5人の先生方は皆、そこまで基本的人権に関する思想をガチッと持っておられたあたりが大事なんじゃないかと思っています。そういう核になる固いものが、少し今は緩んでいると思ったりするんだけど、僕の主観ですが。リベラルというのは大事だと思っていて、ファナティックになったり、カチコチなのは大嫌いなんですよ。柔軟であってほしい、無謬性への批判力も大事です。

加藤 嶋田先生に象徴されるような、「人格」ということをおっしゃったような、そういうものは同志社では大事ではないか。新島の「良心」からつながっているものなんでしょうけど。一種、ピュアなもの、オボこいというか、リベラルと、もう一つこの点が同志社の特徴ですかね。

井岡 社会福祉研究は、関西からや。錚々たる人たちですよ。

小山 大阪社協が特集を2年間に亘って「本質論争」を組んだわけですからね。

井岡 論客がおられるから組めるわけですね。関西の風土の中で、中央に対しては在野。

小山 キリスト教ということ、聖書、新島であったり、一人ひとりの中に皆、あるんだけど、それを表現するものとしてのキリスト教であったり、新島であったり。それを照らすための道具があること

のありがたさ、素直な意味で「底辺に向かう志」という言葉を使うことによって、多くのことが共有できる。クリスチャンであるがゆえに、語らずも、共有できるものがあるように、歴史のよさなのかな、という気がしますね。

加藤 そうですね。

井岡 1年生の時、大塚クラスに割り当てられて入っていました。10人ほど大塚クラスでコンパをしたり、孤立化しないように、ということで大塚先生は、ようやくやって下さったと思うし、その縁で肢体不自由児の療育キャンプに僕も入ったわけ。

小山 大塚先生を、現場系の人たちは好きでしたね。理屈抜きに大塚さん好き、みたいな。現場を大事にしているものが伝わったんでしょうね。あの先生の役割として果たしておられたんだろうなど。同志社を出て現場に行く諸君にとっての支えになっていた事実もあるようですね。理論がこうだからという理屈、ではなく。

井岡 大塚先生から何を学びとったか。「個」の尊重と民主主義的な思考。これを大塚先生から、大塚先生のケースワーク研究から受け取ったね。とても大事なことやと思う。個人の尊重とデモクラシーね。

加藤 ミネルヴァ書房から出た「ケースワーク」は今読んでもしっかり書いていらっしゃるなと思いますね。

小山 もちろん他大学も似ているでしょうけど、講座制でない部分の特徴もあつ

たかもしれない。

井岡 いろんな先生からね。統合はできへんけど。

小山 マクロとミクロの話で、総じてどっちも必要という、この部分は大事にできていたんだろうなど。まさに統合ではないけど、並立することが重要視されて。

井岡 大学によっては同じ福祉系でも技術論、方法論で勝負するところもあったし、政策論でいくところもあったし。同志社の場合は両方ある。なかなか統合できないんだけど、それを体現しているのが嶋田理論やと。マクロな枠組みがあつて、方法論をきちっと大事にして。

小山 バランスがとれている、よさはあるなと思います。お互いが尊重できている。統合できないけど、並立することが大切だと、お互いにわかっているというか。それは同志社福祉の特徴ですよな。

井岡 今でもあるのと違う？ それは大事にせんといかん。

小山 そうですね。リベラルという話や学問上のバランスという小さく聞こえるけど、まさに並立し、並び立っていいんだという、並び立って福祉なんやと。ただ、あり方として悩ましいのが、ソーシャルワークがソーシャルウェルフェアかという議論でいうと、アメリカとイギリスでもイメージが違う。福祉以外の他分野の人からは「社会福祉は将来、社会政策とソーシャルワークに分離するのちがうの？」といわれたという話があ

る。たしかに、社会福祉は外から見た時に社会政策とソーシャルワークの2つに分かれるのではないかという問い掛けが存在するし、アメリカでもソーシャルワーク・アンド・アドミニストレーションであったり、ソーシャル・ポリシー・アンドという学部名称、A&Bという学部名称がある事実もある。ここは問われたら、どう答えますか？

井岡 どちらもないと、お互い不幸になっちゃうわな。

加藤 ソーシャル・ポリシーでもソーシャルワークでも、福祉の固有性は、糸賀一雄の福祉的価値の発見にあるのではないかと思います。重い知的障害の人に高い人間的な価値を見いだしたという糸賀の思想は、福祉の固有性ではないかと思っています。

小山 「この子らを世の光に」。

加藤 そこがね、価値観が大事で、ソーシャル・ポリシーだけでは、一種の労働管理みたいなところがあるので。

小山 ポリシーにしても、ソーシャルワークにしても、背景にある前提となる人間観の話ですね。

加藤 経済学でもないし、法学でもないし、社会学でもないし、心理学でもない。

小山 学問の前提的価値観ですね。教育学もそうあるのではないかと。

加藤 福祉は教育モデルに近いんですよ。

小山 援助という類型に、そもそも教育とか、福祉とかは、そういうものだとい

う。援助側からみると援助系の持つべき共通基礎的価値、「この子らを世の光に」という教育を持つべきだし。

加藤 その中で教育学と違うのは、ソーシャル・リフォーム、まさに「世の光」なんでしょうね。社会に働きかけていくという、個人ではなく。

小山 ソーシャルが一つの軸だというのは、確かですね。

加藤 人間を大切にできる社会をつくるという。福祉は、これから大事ではないかな。

井岡 福祉だけの独占物ではないと思うけどね。

加藤 新しいパラダイムかなと思ったり、ウェルビーイングをずっと求めてきた一つの答えかなと思ったりするんですけど。知的障害の人に人間的な高い価値なんて、アリストテレスもヘーゲルもハイデッガーもいっていませんからね。

井岡 世界宗教としてのキリスト教や仏教が。

小山 価値とか認識論やから、宗教との関係が出てくるし、絶えず前提について語っているけど、福祉たるもの、このような前提を持つべきだという、前提価値だけで社会福祉学は構成されないで、その後の体系ですわね。そこがまだ語れてない部分があると思いますけどね。

井岡 嶋田先生がいわれていた「命を捧ぐ」という。これは原点かなと思うね。

加藤 そんなことをおっしゃるの？ クリスチャンの嶋田先生が。

井岡 仏教的でもあるね。

加藤 仏教的ですね。学生の時、聞かれたんですか。へえ、それは面白い話を聞いた。

井岡 嶋田先生はね。人を引きつける言葉を持っておられるね。

小山 新島襄に近い人なんか。理論的に、というより、ある種、感極まり。

加藤 嶋田先生が授業中に誰かのお手紙を紹介されたときに涙を流されたのは知ってるんです。「こんな教授がおられるんか」と思ったけど。

小山 人間的というか。

井岡 自分の言葉でいわはるね。

井岡 80年代に、学内学会ができたことは画期的、エポックメイキングなことだけど、社会福祉士法制が87年にできて、同志社もカリキュラムを改正して厚生省に認めてもらって。1期生が出ている。岩間君、木原君、所さんとか。

小山 70年代に学園紛争があり、大学が大きくなっていった中でカリキュラムも安定していった、60、70年代を通して、現在のカリキュラムの形に近づいていった。小倉先生がおっしゃる皆、一緒やったという、他にとる科目がなかったという時代から、今の形につながっていた。安定期やったけど、そこに外圧としての福祉士が入ってきたというのは大きな変更でしょうね。

小山 同志社社会福祉学会はその後も続いて、今、いいと思うのは学部学生の研究発表の場にもなってきた。学会の会員がやや高齢化してOB会的になったという批判はあるけど、実は、年に一回の

大会の時に現役の大学院生が研究発表するのに加えて、学部学生がゼミやプロジェクト単位でポスター発表するなどの形は、ますます盛んになっている。

井岡 いい担い手を育てることになるわね。現場実践や研究者の。

加藤 授業に組み込んだらどうでしょう？その一つに学会の発表を入れて。

小山 先生方によってはゼミを、その発表の場にしておられたり。リベラルですから、すべてのゼミが発表という義務はないですが、積極的にどんどんゼミを発表の場にしていくとかしています。

加藤 今年の学会にも基礎ゼミの学生が聞きにきていました。2年生で。「君、来てたの？」と感心すると「はい、来ました」と嬉しそうでした。

井岡 それはいい傾向やと思うね。

小山 土曜日ですからあまり授業とぶつからないですしね。今につながっているよさは、繰り返しになりますが、学問だけの学会だけではなく、現役学生とOBの交流であり、現役学生が発表する場として、この4、5年のことですけど。学内学会の意義として評価される部分ですね。

井岡 いい傾向や。プレゼンテーションの仕方を学ぶしね。

小山 先輩からコメントをもらえたりできるわけですからね。

井岡 学会の一つの発展やな。

井岡 80年代、岡本民夫先生が専攻に入られたこと。嶋田先生の後、80年度。これはね、かねて同志社の純潔主義に対

する批判が内外であったわけや。岡本先生が入ったことによってそれが崩れてきた。個人的に純潔主義は、あかんと思うね。いろんな人をミックスする中でいいものが生まれてくる。いまは学外からも半数はおられるのじゃないですか。とはいえあまり同志社出が少数になっていくのもね。一定部分を確保しておいて、いろんな人が新しい血を入れることは、いいと思う。

小山 そのきっかけになったんですね。

加藤 同志社ナショナリズムでは具合悪いですからね。

小山 新しい先生が同志社らしさをまた、新島らしさ、嶋田らしさではなく、新しい血が入って行って、それが同志社らしさになったらいんですからね。

井岡 黄金時代を担ってこられた先生方が相次いで抜けていかれることで、広く学内外から人材を求めて補充していった。

加藤 同志社のアイデンティティをあまり言わんでもいいのかな。

小山 新しい人を含めてつくっていくものやと思うんですね。新島に遡るのではなく、今ここにいる連中が同志社らしさをつくっているという誇りやと思うんです。50年前と、どれだけ似ているかではなく、今の俺たちがつくっている、これが同志社福祉らしさなんや、というプライドだと思うんですけどね。社会福祉士の話で、当然、福祉士のカリキュラムをおいているけど、それを必修にはしないで考えてきている。改正があって、ま

すますしんどくなったんですけど、余計、意地を張って「福祉と人権」の科目を必修科目にしたり、「社会問題」も頑張って必修を守ったり、「歴史と思想」を新規に選択でおいたり、「福祉原論」も、厚労省では政策論に相当する科目になっているんですね。現代社会と何とかに。その科目とは別に、「福祉入門」に切り返して必修にして、あくまで福祉士科目ではないんやと。この科目は福祉士科目とは違うという再編をしたり。

井岡 それは一つの在野性やろうな。

小山 福祉士をとる人は単位をとったらしいけど。

加藤 「社会問題」をおいている大学はほとんどないと思う。

井岡 同志社の社会福祉学科のアイデンティティは死守してもらいたいと思うし。中身は発展してきているのと違う？

社会問題の実習も課しているわけやから、すごいことや。

小山 選択ですけど。

加藤 それでいろんな地域で学生がサービズ・ラーニングしているのですね。東九条に行ったり。

小山 社会学部をつくる時に「社会問題実習」「国際実習」という、これも福祉士と関係ない選択科目を置いた。

加藤 それは僕らの時になかったな。

小山 今回、設置して。東九条に行くとか、実習でも福祉士受験には役立たないが、認めようという一環で「社会問題実習」をおいている。ある種の同志社らしさ、同志社としての意地張っているところ

ろのつもりなんですけどね。

加藤 多田富雄という免疫学者が「人間はスーパーシステムであって DNA に規定されるだけではなく、自分のシステムを自分でつくっていくものだ」と言っています。他方、新島以来の DNA もある。大事にすべきものと新たに発展していくものと両方必要でしょうね。

井岡 新たに発展していく方向づけの原点に「良心を手腕に運用する人物」「底辺に向かう志」とか、大事なことだね。

小山 聖書みたいなもので、一人ずつ大事にする章、節が違っていいと思うんですよ。ソーシャルワーク系の連中にとっては、これやというのが「人ひとりを大切に」という言葉。ミクロ系にとっては「良心を」というのがピンときてない。でも「人ひとりを大切に」という言葉には反応して、理屈からすると、ただ個別化ですんじょうけど、それを重みのある新島の言葉として大事にしたいなと。大事にしたいものは完全に一致するはずないけど、いくつかの大事にしたい言葉を共有している仲間たちが同窓生かもしれないなという気がしますね。

加藤 いい言葉を残してくださったな。チャペルで、語った言葉ですね。

井岡 少なくとも人権を守り抜くという共通項であってほしいと思うわけね。共通項になっているのではないかなと。

小山 言葉で、メインで出すかどうかは別として。

加藤 「人ひとりは大切なり」は、まさに人権ですものね。インディビデュアリ

ゼーションは人権ですよ。

小山 退学になった学生のことで話題に出た言葉ですね。

加藤 そうそう。

井岡 90年代の主なトピックス。国際的な交流が進み、国際的な視野から客員教授を招いたこと。毎年のように韓国枠とアメリカ、ヨーロッパのスウェーデンから。90年代をとってみても、韓国からは本学の留学生だった金相圭、金萬斗、権度容各先生。アメリカからテネシー大学のカスミ・K. ヒラヤマ、ミシガン大学のジェームス・E. ラベン各先生。スウェーデンからイエテボリ大学のハラルド・スウェドナー、ストックホルム大学のハンス・E. ベルリンド各先生、をそれぞれ招聘した。学部学生、大学院生にも大きな刺激になった。学部学生がその講義をあまりとらないことは残念でしたが。

小山 国際交流が、それがきっかけで、2000年代はどんどん広がって、埋橋先生が来られたことが大きいですが、センターをつくられて。今はどんどん国際交流、ヨーロッパ、中国、韓国、院生たちもかかわって、国際交流の度合いが深まっていますね。

井岡 そこにつながってきている。国際交流のきっかけを作り、橋渡しをして下さった最初の人物は岡田藤太郎先生です。ロンドン大学のロバート・ピンカー先生とか、イエテボリ大学のハラルド・スウェドナー先生は岡田先生と懇意で橋渡ししてもらった。

加藤 岡田先生は世界福祉と同志社と言っておられた。

井岡 岡田先生にはいろんな面で貢献してもらっている。

小山 世界のキーワードは嶋田啓一郎先生が海外で名前を出されて、交流をもたれたことに遡るでしょうね。

井岡 そういうことになる。

小山 埋橋先生も木原先生も、とても積極的に国際的な交流を持たれているのは、そのタネが続いているということでしょうね。

井岡 一つの大きな流れになってきていることはうれしいことですね。90年代は他にトピックスは。95年阪神淡路大震災の時に学生ボランティアたちが神戸に馳せ参じ、教員は後方支援していたことがあったね。

小山 みんなが本当に頑張ってくれた。阪神淡路大震災の時に同志社の福祉学科OBにカンパをもらいまして、当時学生の活動に使わせていただいた。そして、実はその時の残額が若干あって、塩漬けにしている、今回の東北の震災に学生たちが行く時の援助に使わせてもらいました。当時も今回も、同志社らしいのは組織的協力がなく、そのかわり自発的協力がある。大学によっては、震災ボランティアセンターができるところが同志社ではできない。その代わりに、阪神淡路の時は同志社福祉の学生は、空いている研究室を教授会の許可を得て使う形で、公的な援助はないけど教員と学生が協力して活動を行った。匿名では学長

等が毎月寄付してくれたといった形では協力があるんですけど公式なサポートはない。これがちょっと誇らしい気持ちと不甲斐なさを感じるのと、アンビバレントなのが同志社らしさかなという気がしますね。

井岡 2000年に入ろうか。

小山 90年代以降、2000年初頭まで、ずっとあったのは改組転換でしたね。

井岡 90年代の最初から。

加藤 改組転換はいつですか？

井岡 2005年かな。

小山 前史からいえば、90年代から。教員サイド、大学サイドでは改組転換、全学として50年間、6学部体制だったのが、10年で倍になりましたという。同志社の急激な変化のプロセスの中に位置づけられますね。

井岡 2000年代になってエポックメイキングなのは2005年「社会学部社会福祉学科」に。僕は退職まで2年だけしかいなかったけど。

小山 念願というか、苦労しましたよね。

井岡 スタッフも増えた。

小山 形式定員65名を実質定員を90までして、今、93ですからね。その代わり教員も10名体制になって。

加藤 昔の専攻時代は、「7人の侍」だと言われていました。7人体制が長かったんやね。

井岡 学科、学内学会としての一つのまとめをしたのが2004年、学内学会の著作刊行。

小山 同志社大学社会福祉学会で全2冊本ですね。筒井書房から。

井岡 秋山先生が橋渡しして。

小山 1931年から2001年で70周年で、刊行しようということがきっかけやっと思えます。

加藤 井垣先生を委員長にして取り組みました。

井岡 渡辺武男先生が現職で亡くなられたのは2004年。

小山 これを出す時だったと思います。故・渡辺になっていますから、編集の最中に亡くなられて。

井岡 2000年代のカリキュラムの動向、福祉士対応で変わった点とか。

小山 同志社なりの意地は張ってますけど、それ以外は医学部もそうですが、福祉士対応は標準化されてきて。効率化と原則の組み合わせに思うので、原則は福祉士に指定がなくても歴史の科目や思想の科目をおこうと。意地っ張りの部分。一方、現実にあわせないと仕方ないという面もある。さすがに科目が増えてきたので、最近の改正で、4単位を2単位に分割して、障害者福祉、児童福祉の4単位を2単位二つにして福祉士だけほしい人は2単位でいい。本気で勉強したい人は2もとりなさいと、ごく直近で変えています。学生の単位負担を下げていくという妥協策ですね。そんなことも始めています。

井岡 学生の資格志向は？

小山 資格制度が入る前は、実習をとる学生は少なかったですね。加藤先生もと

っていなかったし。60、70人の学生で実習をとるのが20人とかでしたね。僕が同志社に来た年(1993年)の3年生は100人で40人実習をとった。ついに40人を越えたと話題になった。2000年になって福祉士が定着して、7、8割の学生がとるようになり、70、80人になってきた。その流れの基本は変わりませんが、数年前まで実習をとる学生が毎年のように増えていたのが、数年前に減りました。福祉バブルが弾けたと。

井岡 卒業生のうち何%が福祉関係に就職しているの？

小山 同志社が、そんなに時代の影響を受けているとは思わないんです。福祉士制度ができて福祉資格ができて、昔と比べると、公務員とか社協とか施設系でないものを含めると福祉に行く学生はすこずつ増えていると思う。短期的に景気が影響しているとすれば、景気がよくなると、確実に企業の採用が増える。その採用時期が早いので、とられてしまう。福祉に行きたい学生が減っているわけではないのですが、4月1日には4年生の就職が決まっています、それが一流企業なんですね。すると、結果的に福祉に行く学生が減る。景気が悪くなると4年生の4月時点で決まってない学生が増えます。その学生は福祉公務員に行く。客観的な就職事実してとは不景気になると福祉に行く学生が増えるという事実は残ると思います。

井岡 ずっと不景気やね、このところ。

小山 短期的には、よくなったりしてい

ますから。今回の不景気は2, 3年前で、3, 4年前には景気がよくなって採用が上がっていますね。そういうことに敏感に反応します。

井岡 直近では100名のうち、どれくらい？

小山 30, 40名はわからない。学生が報告しないし。卒業後の4月以降も活動中で、決まっているところは本命ではないとか。リベラルですから。100名のうち把握できるのが60, 70名。

小山 大雑把な印象を言うと、企業30, 福祉20, 公務員など非営利計10, ほとんどが企業に行くかという、そうではない。現場にももちろん行きますが、公務員等に結構通りますね。医療ソーシャルワーカーも、もちろんいきます。社協は求人あまり出ないんですね。他には大学院にもいきます。ロースクールに行く学生もいますね。

井岡 どれくらいいくの。

小山 家裁の調査官は学科で2~3年に一人くらいかな。この10年で3, 4人かな。最近是国家2種で厚生労働省とかにも学科から複数いってますね。例えば、この数年の僕のゼミでも、全社協、家裁調査官、国家2種で厚生労働省等々いってます。

井岡 同志社の学生はいろいろ選択肢を持っているから迷う。

井岡 社会福祉士、精神保健福祉士の合格者は増えているのかな？

小山 そうですね。年度ごとで違いますが、福祉職に行く学生がふえる年は合格

率も上がるし。

井岡 3割くらい？

小山 全国が26%で、40%台は昔から受かってたんですが、勉強会をすることで、6~7割くらいになっています。

井岡 特筆すべきことや。

小山 卒業生からは、批判する向きもあります。「今の教授は国の資格如きに尻尾を振っている」と。「昔の先生方は反政府を貫いていた」と。しかし、客観的な事実としては若手の先生方が地道な勉強会をしてくれて、3, 4割やった合格率が、6, 7割になっている。批判する人はいても、していることは悪いことではない。学生のアフターケアの意味でも各教員頑張っている。特筆すべきこととして事例研究会を空閑先生、野村先生たち、ソーシャルワーク系の先生がしてくださっています。定例の卒業生に対する勉強会があったり。学科が今、していることでいえば、ますます国際的にも国際貢献しているし、日本では現場に対して勉強会を主宰していっているし。

井岡 大学院生たちの傾向は？

小山 日本人の受験生が減ってきていますね。この2, 3年は10名の定員で日本人が5, 6人。残りは留学生です。受験生も少ない。定員が満ちなくても落とします。

井岡 前期課程で10名は多いのでは？

小山 「院生を増やせ、外国人を増やせ」という施策があるから、減らすわけにいかんでしょう。

井岡 留学生は4, 5名は来るわけ？

小山 この2年間は日本人5人，留学生
5人くらいです。

井岡 それではこんなところでおわりま

しょう。何か語り尽くせないですね。最
後に，小倉先生が注文をつけてくださっ
て良かったですね。